

小田原の観光の核づくりを

今回の箱根のことで改めて体感的に確認したのは、小田原と箱根は一体の経済圏であることと同時に、小田原の経済の中心に観光があり、その観光は箱根に依存しているということです。（箱根は箱根で観光のあり方を見直す必要がありますが、これについてはまた別の機会でお話ししたいと思います。）

小田原にはいろいろなモノやコトがあると言いつつ、観光に本気で取り組んでこなかった、それが言い過ぎなら、観光と言っても所詮箱根に来る観光客をどう回遊させて小田原に寄ってもらおうかという枠を超えていなかったと言うべきでしょう。ですから、箱根がダメになると小田原もダメになるというのが現実ではないでしょうか。これだけの地域資源がありながら。

ですから、小田原自身に目的来客性のあるモノ・コトを創る必要があります。箱根の影響を受けずに、小田原に人が呼べる、言わば、たまたまではなく、わざわざ来てくれる魅力が必要です。それは箱根にとってもプラスになるはずです。

よく「小田原らしさ」は何かという議論をしますが、もう「らしさ」の議論はやめませんか？ 「らしさ」を超えて、「小田原だけ」、「小田原しかできない」ことを創る必要があります。「らしさ」と言っている限り、人はそれぞれ異なるものを頭に描きます。魚がおいしい、野菜も採れる、特産品もある、里山がある、温泉が近い、歴史がある、文化がある…。しかし、それぞれは日本全国それぞれにあるものです。そうではなくて、「小田原だけ」、「小田原しかできない」、「小田原ならでは」は何か？という突き詰めた問いの先にこそ有効な答えがあると思います。

その中の最有力候補は（天守閣も大外郭も含めた）言うまでもなく小田原城です。それはいくら海老名や厚木や平塚が頑張ってもできないことです。この首都圏近辺にはない小田原ならではの資産を活かさない手はありません。が、現状どうなっているかと言えば、駅に降りてもどこにあるか分からない、どう行けばいいのかも分からない、裏口から入るような案内しかない、というように全くなっていません。駅から大手門までのルートを観光客がワクワクしながらアプローチするようなしかけはハード、ソフトともありません。天守閣を巡る全体の景観が計画されていません。大手門前の広場を含めた天守閣を中心とした圧倒的な景観を演出すべきです。今、人を呼べるのは、箱ものではなく、他にない景観です。

小田原駅からお城へのアプローチを含め、小田原駅東口とその周辺の全体計画が必要です。当所では現在、「中心市街地活性化特別委員会」において周辺地区のあり様について検討しています。それも踏まえつつ、駅前全体の具体の画を描いていきたいと思っています。当

所を挙げての、会員の皆さんの知見を活かした開かれた議論に広げていくつもりです。小田原にしかない、他にはない駅前姿を創りたいものです。

さらに、名所・旧跡を活かす観光と併せて、「小田原スタイル」という今の小田原を楽しんでもらう新しい観光も必要です。産業まつりで進めている「なりわい体験」を産業観光につなげていくことも必要です。その意図をもって企画したものですから。

今回の箱根の自然現象は必ず繰り返します。その時に後悔しないためにも、小田原の観光の核づくりは急務だと思うのです。

会頭 鈴木悌介